

生活科指導における指導力の向上についての研究 —経験の少ない教師と同僚としての教師の協働による実践を通して—

所属校：杉並区立東田小学校
氏名：堀 口 明 子
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：生活科指導・指導力の向上・協働による実践

I 研究の目的

1 現状と課題

「バッタはね、忍者なんだよ。」草地で思う存分虫と戯れ、教師にこう語りかける子供の姿は、具体的な活動や体験を通して何を学んだかを教えてくれる。身近な自然とのかかわり気付きを得ること、対象への振る舞いを改めることは、知を創造することにつながる。そしてかかわりを振り返り、価値ある知として、また、知を創造できる価値ある自分としてとらえなおすことで、自立への基礎が養われていく。これは、知識基盤社会にあって必要とされる「生きる力」を培う学びである。

このような学びを実現するのが、生活科の学習である。生活科の指導では、この教科固有の学び方を理解するとともに、活動に没頭する子供に関心を向け、学びを見取り、受けとめ、働きかける力量が必要である。このような力量がなければ、気付きを受け止めることも、さらに価値ある学びとして高めることもできない。先に例とした子供の言葉にも、学びを見出すことができないのである。しかもこの力量は、子供とのかかわり子供から学ぼうとする姿勢なしには、高めることができない。

生活科の指導力を向上させるためには、まず、子供が具体的な活動や体験を通して学ぶプロセスを踏まえた、授業づくりを構想できるようになることが大切である。その上で、目の前の子供が実際にどう学ぶかを見取り支援を模索することを、教師が体験的に学ぶ必要がある。そのためには、経験の異なる教師が互いの見取りを交流し、検討して、指導の改善を図る取組が有効であると考えられる。

2 目的

ここでは、生活科の指導力の向上を目指して、経験の少ない教師と同僚としての教師が協働による実践を行う。この実践を通して、次の2点について具体的な手立てと更なる改善に向けた課題を提言する。

(1) 授業づくりの構想

(2) 指導の改善に向けた取組

II 研究の方法

1 研究の対象

(1) 対象学級 公立小学校 第2学年 単学級

(2) 学級担任 採用6年目、低学年・単学級担任は初めてである。

2 研究の方法

(1) 授業づくりの構想

具体的な活動や体験を通して学ぶプロセスを踏まえた授業づくりを構想し、経験の少ない教師の理解を促し活用できる手立てを開発する。

- ① 学習指導要領改訂の趣旨・文献の調査
- ② 授業観察・聞き取りによる実態の把握
- ③ 授業づくりの具体的な手立ての構想

(2) 協働による実践

アクション・リサーチにより学級担任（以下T）と筆者（以下H）が課題を共有しつつ指導の改善を目指す。

- ① (1)をもとに、指導への願いを共有して単元計画を立て、共通理解を図る。
- ② 授業ではTが指導者、Hは記録者を原則とし、必要に応じてTへの助言や子供の支援を行う。
- ③ 授業後、子供の見取りと指導の改善について話し合い、共有化して次時の計画を立てる。
- ④ ②③について、記録を作成する。

(3) 実践の振り返り

子供の変容や指導の実際から、指導力向上につながる成果と課題をまとめる。

- ① 実践の記録の整理・考察
- ② 子供の作品の整理・考察
- ③ リーフレット・研究を省察した記録の作成

III 研究の結果

1 授業づくりの構想

(1) 5つの学習ステップの構想

子供と対象とのかかわりを軸に、生活科の学びのプロセスを整理した。これを基に④と⑤のステップを重視し、単元の指導計画を立案することにした。

- ① 対象に思いをよせる
- ② 対象とのかかわる方法を模索する
- ③ 対象とのかかわりを深める

④ かかわりを振り返り、自分の学びを他者に伝える工夫をする

⑤ 自分の学びを他者に伝え交流する

(2) ポートフォリオの活用

④と⑤のステップを具体化するために、ポートフォリオを活用することにした。子供の作品を蓄積したワーキング・ポートフォリオから、子供自身の規準で作品を選び、再構成してパーマネント・ポートフォリオを作成し自己評価・他者評価ができるようにした。

(3) 気付きを基に考えさせるための手立て

パーマネント・ポートフォリオを作成する活動では、気付きの質を高めることをねらい、考えるための具体的な学習活動を意図的に指導することにした。

手立ての例	期待する思考・認識等
自分の気に入った作品を選ぶ	対象とのかかわりを振り返り、自分にとって価値のある気付き、自分の頑張りなどをとらえなおし、自覚につなげる。
見出しを付ける	気付いたことをとらえなおし、伝えたいことを明らかにする。
吹き出しに書き入れる	新たな気付きを付け加える。伝えたいことを明らかにする。
いくつかのカードを並べる	時系列に並べて変化に気付く。関係に気付く。

2 協働による実践

(1) 実践の経過

月	内容
4	対象学級の授業観察
7	研究の方法を検討するための予備的な実践など
9~12	「生きものとなかよし 内容(7) (全19時間)」
1	「あったかハートをとどけよう 内容(8) (9) ※平成20年3月公示学習指導要領による (9/17時間)」

(2) 指導の改善に向けた取組

① ルーブリックの作成を通して

TとHの子供の見取りを交流し検討することで、見取りと支援に必要とされる力量形成につながらないかと考え、生まれて2か月の頃のザリガニの観察記録についてルーブリックを作成した。

ルーブリック作成の方法

- TとHが、①ザリガニへの気付き ②ザリガニとのかかわりの深まり の観点で個票にABCDの4段階で評価する。
- 評価が一致した項目について、その根拠を記入する。
- 同じ評価になった作品を比べて、コメントや作品の特徴の共通性を抽出し、ルーブリックの評価項目を決める。

Tは、自身の評価に自信をもち、子供への具体的な言葉かけをイメージできた様子だった。しかし、生まれて3か月の観察記録を書く授業では、A評価につなげる言葉かけはほとんど見られなかった。A評価の具体的な姿をイメージすることは難しく、ルーブリックの評価項目をわかりやすい表現に直す必要があると考え、A評価の言葉を再

度検討した。

改訂したルーブリック

評価	ザリガニへの気付き
A	いくつかの事実を集めて、それを根拠に自分なりの考えを書いている。
B	関連づけ「～すると～する」理由づけ「～だから～だ」などの表現がみられる。特徴をつかんだ絵
C	事実のみが書かれている。大体の様子がわかる絵
D	確かなことが書かれていない。実物とかけ離れた絵

② 見取りを交流し、検討して、支援につなげる
気付きを基に考えさせるための手立ての指導は、その意義についてTの理解が得ることが難しかった。そこで、子供の作品を見ながら、期待する気付きと具体的な支援について話し合った。次時の指導では、個々への積極的な支援が見られた。

IV 考察

1 生活科の指導力の向上につながる要因

下記の要因に対応する手立てを工夫することで効果が期待できると考えられる。

(1) 経験の少ない教師の抱える課題

- ① 学習活動への子供の思いや願いをいかすことと教師の適切な指導への理解。
- ② 具体的な活動や体験を通して学んだ姿、気付きの質を高めた姿を見取ること。
- ③ 低学年の子供の発達特性である「比べて考える」「分類して考える」ことなど、学習活動に位置付ける意義の理解と指導の具体化。

(2) 経験の少ない教師と協働する教師の抱える課題

- ① 経験の少ない教師の問題意識に気付き共有すること。
- ② 経験の少ない教師への適切な期待。

(3) 協働による指導の改善に向けた取組の課題

指導の改善に向けた取組の課題は、問題点を指摘することではなく、子供の学びを共に求める観点で設定すること。

2 指導力の向上につながる具体的な手立て

(1) 子供の見取りを共有する具体的な活動

子供の見取りを交流することは、双方に見え方の傾向や見えていないことへの気付きをもたらす。さらにその後の支援について見取った姿や作品をもとに協議することはより具体的で個に応じた支援につながる。

(2) 対話を円滑にする視覚的なツールの開発

経験の少ない教師に、同僚としての教師の実践知を伝えるには、相手の理解を確かめながら対話を繰り返す必要が生じる。そこで単元計画構想シートのような、対話を仲介するツールの開発が期待できる。

